

## 神戸新聞NEXT | 社説 | 伊方再稼働／災害に不安を残したまま

甲第  
259  
号証

四国電力はきのう愛媛県の伊方原発3号機を再稼働させた。定期点検による停止から5年4カ月ぶりで、近く発電と送電を始め、9月上旬に営業運転を再開する見込みだ。

福島原発事故を踏まえて策定された新規規制基準に基づく再稼働は5基目となる。ただ、関西電力高浜3、4号機（福井県）はいったん再稼働したが、大津地裁の仮処分決定で運転が差し止められている。

国内の商業用原発42基のうち、稼働していたのは鹿児島県の九州電力川内1、2号機だけだった。

安倍政権は原発の再稼働に積極姿勢を見せる。伊方再稼働で他の原発の運転再開に弾みがつくことを期待しているのではないか。

だが、最重視すべきは安全性の確保である。事故による被害を招かないよう対策を講じるのが先だ。

伊方原発の近くには日本最大規模の活断層「中央構造線断層帯」が走り、熊本地震を機に活発化が心配される。住民の避難計画は不十分で、「見切り発車」というしかない。

伊方3号機は昨年7月に審査に合格した。ただ、最大級の地震の揺れの想定値を規制委の要請で引き上げたため、事故時の拠点となる免震施設の強度不足が判明した。敷地も手狭で、原子炉の冷却機能を維持する電源車の設置場所も足りない。

四国電は追加工事に対応しているが、1次冷却水循環ポンプのトラブルで再稼働の予定が遅れるなど、運転の安全性が懸念される状況だ。

最も不安視されるのは中央構造線が引き起こす地震の影響である。南海トラフ巨大地震との連動でマグニチュード（M）8級の地震が発生する可能性を専門家は指摘する。

伊方原発は佐田岬の付け根に位置する。住民の一部はフェリーなどで対岸の大分県に避難する計画だが、交通網が寸断される大災害時に輸送が可能か疑問視する声は根強い。

国も愛媛県も避難計画に課題があることは認めている。今後、改めて避難訓練を実施して計画の充実を図るというが、順序が逆である。

大地震と原発事故が同時に起きれば、影響は広範囲に及ぶ。それが福島の事故の教訓だ。松山、大分、広島地裁で運転差し止めの仮処分が申し立てられ、厳しい司法判断が示される可能性もある。「安全確保が最優先」というのなら、本来、運転の前に安全対策を徹底すべきだ。

### 社説の最新